

『美しい恋愛』

作者 浅羽一

最後までいい足を伸ばして眠ろうと思った。きつと、その方が結末として相応しかった。ずっと、美しい恋に憧れていた。真実の愛を夢見ていた。純文学で描かれるように淑やかで、海外小説の定番さながらに華やかで、少女漫画みたいに甘く、流行りの歌にも決まって綴られる一途な関係。それはつまり、理想の中にしか存在しそわないものだ。そしてだからこそ、私は眠る時くらい現実を忘れようと思がいていた。

常に膝を抱えてベッドに潜ったのは、そうすれば少しでも幼いままでいられるかなと思っていたからだ。体が大きくなることを遅らせられれば、その分だけ長く、虚構の世界が真実であると信じていられる。何も知らない振りをして純粋を気取っていても、それが真実であると信じてもらえる。

要するに私は、多分、周りにいる誰よりも現実の生々しさを知っていた。いや、その無慈悲さを肌で感じていた。なぜなら私は、周りにいる誰よりも美しく生まれてこなかった。

己の醜さを自覚したのは、ずいぶんと早い時期だった。可愛らしいリボンをして、素敵なお洋服を着せられて、ピンクの靴には沢山のきらきらが付いていて、それなのに私はどうしても眼前の鏡に映る相手を好きになれなかった。幼稚園の先生から微笑みかけられるたびに、ぎこちなくしか動かない頬の感触に泣きそうになった。綺麗になったねと親戚の人から言われるたびに、大人の嘘の吐き方を学ばされた。あなたは大切な子供だからと頭を撫でられるたびに、ごめんなさいと声に出さず繰り返した。男女の区別さえも曖昧で、泥だらけのトカゲや蛙でさえ愛らしく見えた心なのに、そこに立っている存在をあまりにも不細工としか思えない現実が、嫌いと言うよりも、悲しかった。

詰まる所、私の理想はそのまま無い物ねだりだった。でも、だからこそその想いは時が経つにつれ薄れるどころか強まっていった。アイドルみたい性格の良い人と恋に落ちて、海外スターくらい素敵な人に愛を囁かれて、作り話にしたって出来過ぎなほど豪華な舞台で、世界に一つきりの劇的な展開に身を投じる。そして、そんな完璧に美しい恋愛物語の中に登場する私もまた、とびきりの美貌を備えた最高の女性なのだ。

本当に、もしもそうであつたならどれほど素晴らしかつただろう。

でも、実際はそうじゃない。だとすれば、そんなことが許されるはずもない。だって、私みたいな人間がそんな大それた役を演じるなんて、そもそも私自身が認められない。美しさとは、混じり気がないからこそ輝くのだ。輝かしい光景を濁らせるような存在は要らない。

そう、私はいつまでも夢を見る一方で、ちゃんとそれを理解してもいた。だからこそ、現実では高望みなんてしなかった。

十代も半ばを迎え、徐々に周囲の人間関係が変化していく頃になっても、私はきちんと分をわきまえていた。人気のある先輩や格好良いと評判の同級生になんて喋りかけるどころか近付こうとさえ思わなかった。私が多少なりと言葉を交わしていた相手なんて、どれもこれも卒業後には皆の記憶からあつさり消えてしまふような人間ばかりだった。

大学に入り、二十歳を過ぎてから知人の紹介をきっかけに初めて付き合うことになった相手も、お世辞にも男前だなんて言えそうな人では全くなかった。むしろ、電車で不意に隣へ座られたら、思わず一駅くらいなら立っていかうかと考えてしまふような外見だった。そしてまた私同様、彼自身もそれをちゃんと理解していた。

「俺たちは外見で結ばれたわけじゃなくて、心で繋がっているんだから」

ことあるごとに彼はそう繰り返した。まるで、それこそがどんな関係よりも素晴らしいものであると言わんばかりに。私はそれにいつもごちなく笑い返しながら、内心では美しくない人間だと綺麗事すらくすんでしまうのだなと思っていた。確かに、彼は悪い人でなく、それどころか良い人の部類に入ったのだろう。でも、口づけを交わすたびに募る嫌悪感と、ベッドの上で抱かれるたびに感じる鈍い痛みは、到底そんな事実で覆い隠せるものでなく、私は彼の傍らで膝を抱えて眠りながら、せめて夢の中では甘い官能に犯されてみたいと願っていた。大学を出て社会人になり、自然と関係は終わっていったが、結局、最後の最後まで目を開けて彼を受け入れることは無いままだった。

それから、数人の男性といわゆる恋人関係になった。残念ながら、決してモテたわけじゃない。魅力なんて欠片も増えちゃいない。ただ、逆にそうだからこそ寄ってくる男もいると言うだけだ。世にも稀少な変わり者と言う意味ではない。要するに、私みたいな女は裏切るはずがない、私くらいの女しか自分を相手にしてくれない、私なら内面こそを評価してくれるに違いない、なんて、常に愛情の前にそんな卑屈な予防線を張っているのだ。そしてまたさらに厄介なことに、こいつの良さを分かかってやれるのは自分だけだなんて考えまで抱いている。と言うよりも、本気で錯覚している。そんなもの、せめて一つでも良い所があると思わなければ、そんな相手と付き合っている自分の方が惨めになると無意識のうちに恐怖しているだけなのに。或いは、こんな女にも一つくらい良い所があるはずだと、ひいては自分もそうに決まっていると夢を見たいだけなのか。だとすれば、私たちの別れがいつも夢から覚めるように訪れていたことも頷ける話だった。

私は思っていた。気付けば年齢は三十に迫り、多分、次くらいに出会った相手と結婚し、やがて子供を産み、まるで自身の命を移し替えるようにその子を育てながら老いていくのだろうと。いつの間にか膝を抱えて眠る癖も消え、部屋中に積み上げられた恋愛物語は子供のおもちゃや家族の洗濯物に変わり、やがて化粧をすることさえも億劫になった私は、鏡台の前に座って不快な気分になることもなくなる。そうしていつしか己の醜さも忘れ去り、終いには自分たちの子供に向かって平然と可愛いわなんて言うようになるのだ。

：なんて退屈な現実だろう。いや、それはある意味で美しい未来かも知れない。決して不幸ではないだろうし、むしろ状況のみを聞いていればごく一般的な家族そのものと言った感じだ。ただ、悲しいかな、少なくとも私自身がそれをまるで美しいと思えないだけで。そうして私は相変わらず、現実の合間に夢を見て、一日の終わりに膝を抱えると言う生活を送っていた。平々と、淡々と。二十代最後の歳になるまで残り二ヶ月を切っても、何かが変わる予兆なんて微塵もなかった。

彼が現れたのは、突然だった。彼はいわゆる転職組で、立場上、私は上司となった。上司と言ったって、役職に就いているわけじゃなく、ただ単に先輩の一人として職場に慣れるまで世話係を任されたというだけだ。だから、本来であればやがて手の平に掬ったぬるま湯が自然にこぼれて蒸発するように消えていく関係性のはずだった。

ただ一つ、彼が美しかったという問題さえ無かったなら。客観的な事実として、彼は美しかった。すらりとした長身はスーツの外からでも引き締まっていると分かり、整った鼻梁の左右に配置された眼差しは一流芸術家の彫刻作品を思わせる気品を宿していて、さらには発せられる声までもベテラン声優よろしく深みがあっ

た。しかも、独身。当然と言うべきか社内の女性社員はにわかに盛り上がり、その内の一部は我こそが彼のお相手になろうと、いかに自身が魅力的であるのかのアピールに精を出したり、はたまた大人の女特有の駆け引きを始めた。でも、幸か不幸か、そんな中であつて、ある意味で彼に最も近い女性社員である私に対して、嫉妬やひがみから来る嫌がらせなどは皆無だつた。理由なんて言うまでもない。

正直、私は出来ることなら、彼と接することを避けたかつた。我ながら贅沢な話だと思ふ。実際、それなら代わってくれと手を上げる女性社員は幾らでもいただろう。勿論、彼に責任はない。それどころか彼は、少なくとも仕事中は真面目で有能で、もしも私が体育会系の人間などであつたならむしろ気に入つていたかも知れない。でも、現実の私は何処まで行つても現実から逃れられないのだ。だつたら、せめて夢くらい夢のままで見たい。

私はきわめて単純に、つまりは淡々と事務的に彼と付き合つた。普段から俯いている私にとつて彼の顔を視界に入れないことは容易く、向こうが一体どんな反応を浮かべているのか知らなかつたけれど、分からないことがあると質問されれば丁寧な教えたし、間違つてゐる所があれば冷徹に指摘した。ある意味で、それは外見を理由とした特別扱いであつたのだが、しかし一般的にそうだと思われそうな扱いは一切しなかつた。

全くもつて面白味のない人間だろうと、自分でも承知してゐた。いつそ嫌われてもおかしくないときえ自覚してゐた。でも私は、短い期間だけであつたものの、最後までその姿勢を貫いた。仕事に關すること以外の会話をした覚えなんて、ほとんど無かつた。

だからこそ、最終日に彼の方から「お世話になつたから」と夕食に誘われた時は、驚いた。と言うよりも、理解出来なかつた。思わず顔を上げた私の目に飛び込んできた彼の顔はやはり美しく、なるほど、確かにこんな笑顔を向けられれば誰でも惹かれてしまふだろうと納得した。

そんなつもりはまるで無かつたはずなのに、気付けば、私は自身でも知らぬ間に頷いていたらしがつた。彼はあたかも少年のように明るい口調で、「ありがとうございます」と言つてきた。

どうしよう、どうしようと焦る心中を悟られたくなくて、私は出来る限り普段と同じように振る舞つた。仕事が終わわり、会社を出て、やがて私たちは飲み放題を売りにする居酒屋チェーン店の片隅で向かい合わせに座つてゐた。

何を頼むよりとりあえずビールと、会話下手の社会人にありがちな注文をしてから、後は彼に任せるままにした。しばらくしてお通しとビールが運ばれてきて、彼がグラスを持ち上げた。

「本当に、色々ありがとうございます。まだまだ未熟者ですが、これからもよろしくお願ひします」

その声で紡がれたなら、そんな定番の前置きさなお芝居の台詞みたいに聞こえた。だとすれば、相手役である私の大根っぷりは凄まじかつただろう。舞台での発声とはほど遠い声で「乾杯」と返すのがやつとだつた。

それから適当に注文の品がやつて来た。だけど私はそれらにあまり手をつけず、かといつて酔つ払つて醜態をさらすことも恐ろしかつたから、ぬるくなつた泡をついばむようにいつまでも最初に頼んだビールを握りしめていた。

「すいません」と、唐突に言われたのはガラスの表面が手の平の温度と同じくらいになった頃だった。

またしても反射的に顔を上げた私の目に、困ったような彼の顔が飛び込んできた。彼は再び「すいません」と言った。やっぱり、この人の言うことはさっぱりだと思った。そしてそれは自分たちが違いすぎるせいだと思った。けれど、そのはずだったのに、次に発せられた言葉は、私にもちゃんと通じる内容だった。だから、余計に混乱した。

「俺ばっかり話して、あんま楽しくないですよね」。駆け引きとか、言い訳とか、そんな感じは欠片も無くて、それはただただ申し訳なきような声だった。

私は固まった。何も言えずに、照れも忘れて、悲しみさえ装飾になるその瞳を見つめた。楽しかった。当たり前だ、楽しいに決まってる。場所は安い居酒屋で、ガラスの自身だつて気の抜けたビールだとしても、彼みたいな相手と一緒に、それも二人きりで過ごせる。そんな夢のような時間が楽しくないはずがなかった。

でも、それ以上に、自分みたいな人間が楽しんでるなんて知られなくなかった。私はそっと目を逸らした。

彼は多分、悪い人ではないんだろう。仕事中心か見ていないし、スーツを脱いだらどんな生活を送っているのかなんて知らないけれど、少なくとも勤務態度から感じられる印象としてそう思った。ましてや、こうしてわざわざ私なんかを誘ってもくれている。どれだけ都合良く思い出そうとしても、親しみやすい先輩とはかけ離れていたはずなのに。彼に誘われたい人間なら、他に幾らでもいるはずなのに。

「…どうして、私を誘ってくれたの」

それは、気まずそうに黙ってしまった彼へと差し伸べた救いの手、ではなく、むしろ沈黙の息苦しさに溺れそうになった私のあがきだった。

果たして、彼は間を置かず応えてきた。

「あなたは他の人みたいに上辺だけの付き合いをしないから」。そして、そうだからこそ、そんな人とは本当に仲良くなりたかったと、彼は綺麗すぎて作り物じみた答を、しかし本心だと感じられるくらい誇らしそうな声で語った。

私はそれを、深夜の映画館で公開前の新作を独りで眺めているような気分で聴いていた。もう、口を開いたら泣くかも知れなかった。なぜなら、彼の言葉がとても感動的で、間違ひなく喜ぶべきははずのものであったからだ。だからこそ私は、あまりと言えは見当外れなその言葉に、己の惨めさを一層激しく思い知らされた。きつと、私以上に彼に対して上辺だけの付き合いしか望んでいない人間なんて、他にはいなかった。

本当に、何て面倒な性格なのだろうと嫌になった。最早、ただの被害妄想だ。

でも、たとえそうであっても、それが私なのだから、どうしようもない。そしてまたそんな性格だったから、こうして二人きりで食事をする幸運にも恵まれた。そんな皮肉さが情けなくて、悲しくて、いっそおかしくて、私は遂に吹き出した。少し酔っていたせいもあるのかも知れない。私はテーブルの真ん中に積まれた枝豆の皮を見下ろして、あまり声は上げずに笑い続けた。

多分、彼はやっぱり何も分かっていたのだろうけれど、私が落ち着くまでずっと一緒にあって笑っていた。

その日以降、彼と仕事を一緒にする機会はほとんど無くなった。でも、彼は以前にも増して私へ話しかけてくるようになった、周囲の目なんて気にせず堂々と。私はいつしか、廊下を曲がるたびに彼がいるんじゃないだろうか、期待と恐怖がどろどろに融合したような気分を抱くようになっていた。彼が胸を張れば張るほど、私の背中丸まっていた。「もつと顔を上げて歩けば良いのに」

ある日の休憩中、昼食を食べに外出しようとしていた所で彼とばったり遭遇し、開口一番そんなことを言われた。

余計なお世話だと思った。ありがたうとも思った。どちらも口には出さなかった。

「本当は綺麗なのに、勿体ないですよ」。すると彼は続けてそんなことを言ってきた。冗談めいた口調に、まるで、そう言えば私が喜ぶと思っている風な声を載せて。だから私は逃げ出した、返事もせずに。立ち止まる勇氣も、振り返る強さも持ち合わせていなかった。

彼から電話があったのは、その日の晩だった。

仕事以外の用事で連絡を取り合うことなんてほぼ皆無だったから、それに出るまでずいぶんと迷った。いや、最初は出ないでいようと決めていたはずだった。にも関わらず、あと一回のコールで留守番電話になると思った時には、すでに「もしもし」と応えていた。

『もしもし』と聞こえてきた声は、錯覚でなければ僅かに緊張していた。見えないはずの顔が、瞼に焼き付いているみたいに浮かんできた。

しばらくの間、彼はとりとめもない話題を口にした。私はそれにいちいち短い相槌を打ちながら、だけど話なんてろくに聞いていなかった。

『あなたが好きです』

突然、告げられた言葉に、私は同じように繰り返しかけて、寸前で声を飲み込んだ。

静けさは、しかし完全な無音でなく、鼓膜には色んな音が聞こえていた。すぐにでも電話を切りそうになる衝動に耐えられたのは、そこが自分の部屋であったからだ。数え切れないくらいの夢に囲まれて、私はベッドの上で膝を抱えて座っていた。

「無理よ」と沈黙を破ったのは、私だった。

『どうして』と問う声に、私は「だって信じられない」と答えた。初めて、彼に本心を告げた瞬間でもあった。

『どうして信用してくれないんですか』

そんなの簡単だった。私が嫌な人間だからに決まっている。そして、それを素直に言えないからこそ、嫌な人間なのだ。

私は必死で感情を押し殺して、ぐちゃぐちゃな頭の中から賢明に言葉を探し出した。

「あなたと私じゃ見た目も違いすぎるから」

『そんなこと無いよ』

「そんなことあるわ」

『：じゃあ、もしもそうだったとしても。俺は外見だけで人を選んだりしない。だって、どんな奴も五十年もすれば同じじゃないか。だったら、俺は五十年後に一緒にいたいって想える相手の方が良い』

そんなことを言われた経験なんて、それまでにただの一度さえ無かった。気付けば痛みを感じるくらい、携帯電話を耳に押し当てていた。同時に、やっぱりと思った。やっぱり、

彼は主役になるべくして生まれてきた側の人間なのだ。好きで選ばない人間と、どうあつても選べない人間とでは全く違うし、選ばないだけの人間に選びようのない人間の気持ちなんて分かりっこない。そのことを彼は少しも分かっていない。いや、そもそもそんな発想自体が無いのだろう。

彼が悪いのではない。それどころか彼は素晴らしい、紛れもなく。でも、だからこそだ。『どうしたら信じてくれるんです』

真剣な問いかけが耳へと届き、それがこちらの背中を押した。

あなたのその顔が潰れても、それでも尚、同じことを言ってくれるのなら。

さすがにそれを口にするにははばかられ、代わりに私は「なら、五十年後にまた言つて」とだけ告げて、もう返事も聞かずに電話を切った。酷い女だと思われたらどうしようなんて不安を抱きながら、それならいつそ嫌いになつてくれれば良いのにと願つて。

翌日から、私は彼を避けるようになった。難しくはなかった。元々が遠い人間同士なのだ。片方が近づいてこようとしても、もう片方が退きさえすれば、永遠に重なることはない。

仕事帰り、本屋やビデオ屋に寄つては理想通りの作品を探すことが日課になった。それはつまり、彼そっくりの男性が主人公のもので、それに相応しい女性がヒロインのものであった。残念ながら、完璧に望み通りの物語は見つけられなかったけれど、新しい夢に浸っている間は現実を忘れられたから、私はこれで正しいのだと自らに言い聞かせ続けた。

再び彼から連絡があつたのは、あれからもうじき一月が経とうかという日の夜だった。何の前触れもなく届けられたメールには、突然の非礼を詫びる簡単な文章と、それに続いて何処で知つたのか私の誕生日に関することが記されていた。そして最後に、へせめてもう一度だけ、一緒に食事をしてくれませんか。

メールを三度読み返し、しばらく膝を抱えてから、改めて三度読み返し、最終的にどうすれば良いのかと頭を抱えた。

誕生日に誘われるなんて、それも彼から。夜景の見えるレストラン、異国の古城のバルコニー、豪華客船のフロアに、高級ホテルのスイートルーム……。沢山の情景が次から次に浮かんでは消えて、それらの全てに彼がいた。相手はその都度変わっていたけれど、どれも皆、一流の女優や有名タレントばかりだった。

それから二時間、私はメールを返せなかった。返さなかつたんじゃない。

するとちようど日付が変わつた頃、彼から再びメールが届いた。

へもしも困らせていたら、すいません。だけど、真剣だから。とにかく、当日、待つてます。来てくれることを、本当に願います。

：ああ、と喉が震えて声が漏れた。その後に続く待ち合わせ場所と時間を教えてくれる文章に、視界がにじんだ。運命なんて単語が浮かんできて、そんなもの現実には単なる言葉遊びでしかないと分かつていたはずなのに、胸が弾んだ。彼の前でケーキに挿された蠟燭を吹き消す相手が、自分に変わった。

指は知らぬ内に動いていて、携帯電話はこちらへの確認もせずにそれを実行した。

ややあつて返つてきたメールは、それまでとは一転して華やかな絵文字や記号に彩られていて、案外こちらの方が彼の素なのかも知れないと、空が白むまで何度も何度も読み返しては想像していた。

三日後、仕事を終えた私はいったん家に帰ってきて、出かける支度をしていた。

いや、正確に言うと、支度はすでに二日前から出来ていた。服やカバンは選んでいたし、靴は磨いていたし、髪にはトリートメントをして、お化粧の手順まで確認していた。だから問題は、まさしく今朝、夢から覚めてしまった私自身だった。

カーテンを開くと外は信じられないくらいの大雨で、昨日までは気持ちよく晴れていたのに、テレビの天気予報士は今日はずっと激しい雨に注意しなければならぬと神妙な様子で警告していた。それはあたかも世界全体から否定されているようで、バチバチと乱暴にアスファルトをたたく雨粒は、応援の拍手どころか不満に足を踏み鳴らしている風にか聞こえなかった。

朝からどんよりとしていた空は、日が暮れるといよいよ暗くなり、それは黒と言うよりも濁った灰色という感じで。そんなモノクロじみた世界の中で、浮かれて選んだ洋服はまさしく滑稽なまでに浮いていた。

家の前からタクシーに乗ったせいで、予定していた時間よりもだいぶ早く待ち合わせ場所に近いに近づいていた。

約束の場所から敢えて少し離れた所で車を降り、普段よりも人通りの少ない歩道を歩き出した。絶え間なく鳴る傘の下で、あつという間に濡れて汚れる靴の先を見つめていた。

先に気付いたのは私の方だった。街灯に照らされたビルの角を曲がって、後ほんの二十メートル。新装開店したばかりのデパートの玄関前で、傘を脇にたたんだ彼がスーツ姿で立っていた。かすかに見える小さな紙袋は、もしかしてプレゼントだろうか。

何て絵になる人だろうと思った。本当に、こんな時間から待っていてくれることに感動するよりも、プレゼントらしきものを携えてくれていることに感謝するよりも、何よりもまずそのことに感心した。そして私は、足を止めていた。

ビルの陰に隠れて、万が一にも見つからないように傘を小さくして、雨粒も構わず彼の姿を眺めていた。

視界に彼がいるだけで、デパートの明かりが舞台照明みたいに輝き、鬱陶しい雨音すら映画の効果音めいて聞こえた。大人っぽく歩いて近づいていく方が良いのか、それとも水を跳ねさせながら小走りに駆け寄っていく方が良いのか、先に声を掛けるべきか、はたまた気付かれるまで待つべきか、色んなパターンを想像してみた。

脳裏に描かれる光景はどれも美しく、どんな小説や映画にも負けないと確信した。近づいたらたちまち台無しになってしまいうで、私はいつまでも動かなかった。

と、どれくらい経った頃だろう、いきなり彼へと話しかける影があった。遠目でも分かる、デパートから出てきたのは赤い傘と黄色い傘を持った若い女の子二人組で、彼女たちはもしかしたら建物の中にいる時からすでに機会を窺っていたのかも知れないと感じた。

どんな会話を交わしたのか、私に分かるはずもなかったけれど、ややあって彼が軽く会釈すると、彼女たちは多少の名残惜しさをにじませつつもやがて並んで歩いていった。何度か立ち止まって振り返っているらしい彼女たちを、彼はもう気にしていなさそうだった。そうして再び、彼の落ち着いた一人舞台が始まった。

何てことはない、それだけの話だった。実際、予想外の場面なんてそれくらいだった。でも、私はもう感動していなかった。胸の奥はいつしか罪悪感で一杯だった。

…果たして、それは一体、何に對しての罪であったのだろうか。



自分でも上手く言葉には出来なかった。だけど、もうそれまでと同じ調子で見つめていることも出来なかった。

立ち去ることに躊躇いはなかった。最後に一度だけ彼を見れば、ちょうど腕時計を確認している所だった。つられて私も腕を見れば、時間はそろそろ約束の頃になるうとしていた。

雨は急かすように勢いを増しつつあって、タクシーは一向に掴まらなかつた。そのくせ歩道からはどんどん人影が消えていて、私は一人、歩いていった。

携帯電話の着信に気付いたのは、たまたま交差点で赤信号に立ち止まった時だった。

カバンを開けて取り出すと、画面には一通の新着メールの受信が示されていた。彼からのメールを開いてみれば、そこには明るい彩りと共に「雨が強くなってきたけど、大丈夫？ 迎えに行こうか？」と綴られていた。

分かっていた、返事をしなければならぬと。そうでなければあまりにも失礼だと。

でも、出来なかつた。そして私はこんな所で泣き出したりしたくなかつたから、すぐにカバンへ携帯をしまつて、もう二度とそれを開かなかつた。

翌日、いつも通りに会社へ行った。一晩中考えたものの、どんな顔をしていれば良いのか決められなくて、結局は諦めた。どうせ常に俯いているのだから、関係ないと言い訳して。まさか、出社早々いきなり顔を上げるなんて考えてもいなかつた。

彼が亡くなったと語る上司はいかにも沈痛そうで、同僚の女子社員たちは人目もはばからず泣いていて、たまたま私よりも先に来ていた男性社員が暗い声で「昨日の夜、誰かに会いに行く途中に川で溺れてる人間を見つけて、助けようとしたんだって。あいつらしいよな」。

何も、答えられなかつた。だって、そんなことを言われても分からなかつたからだ。

私は知らない。彼らしいなんて、分からない。だって、彼のことなんて、現実の彼が普段はどんな人であつたかなんて、私はほとんど見ていなかつた。

お通夜の会場となつた寺の境内には、彼の人柄を証明するかのごとく大勢の人が訪れていた。

記帳を済ませて並んでいると、建物の中の家族や親戚らしき人々、外で待つ彼と同年代の男女に、会社の関係者、それ以外にも沢山の人の悲しそうな表情が視界に入ってきた。そして、そんな中でも特に印象的だったのは、会場の一番隅っこで号泣しながら遺影の方に謝罪を繰り返している一家だった。時折、「例の酔っ払いの家族だつてよ」などと叫ぶ声が聞こえてきて、それが彼によつて助けられた相手なのだど知つた。四十代半ばくらいの夫婦に、高校生くらいの息子と、中学生くらいの娘。それは何処にでもいそうな家族で、彼と引き替えに救われた父親も、至つて平凡な中年だった。

棺桶に入っている彼の姿を目にすることはついぞ叶わず、私を含む同僚連中は順番にお焼香をして、やがて全員が終わるのを待ってからその場で解散した。男も女も関係なく、周りのほとんどが泣いている中、私は一滴の涙さえこぼせなかつた。

その夜、どれだけ頑張つても眠れず、深夜にベッドから起き上がった私は、何を考えたのか灯りも付けずにネットで水死体というものがどんな様子であるのか、探してみた。

かちかちと酷く耳障りなマウスの鳴き声に苛立ちながらも、およそ五分。

そうして見つかった画像には、空気でなく汚水をばんばんになるまで入れられたゴム風

船みたいな塊が映っていて、その瞬間、反射的に両手で口を押さえていた。そこには最早、人としての美醜なんて全く意味を成さない現実があった。激しい嘔吐感の余韻なのか、吐かなかった代償なのか、ぽろぽろ涙がこぼれてきて、私はパソコンをそのままに真つ暗な洗面所へと駆け込んだ。

悲しいのか、申し訳ないのか、寂しいのか。…それとも、まさか愛しいのか。

瞬きのたびに様々な映像が流れて消えて、それは止めどなく溢れてきて、私はいつまでも己の感情の正体を判断出来ぬまま、ただただ大声で泣き明かした。

数日後、ネットで見つけた品物が届き、私はお通夜から帰ってきて以来久しぶりに部屋のドアを開けた。ずいぶんと忙しいのか、代金を渡すやいなや宅配業者の男性はそそくさとお札を言つて去つていった。

両手に乗るほどの地味な小包を開けると、中にはメモが一枚と、高級チョコレート箱の箱蓋を開けて、夢を見る薬と、夢の世界へ行く薬をそれぞれ取り出した。前者は白い粉剤で、後者は青いカプセルで。カプセルを先に飲んでから、やがて粉剤を静かに飲むようにと、それが正しい順番だとメモでは説明されていた。何とも気取ったネーミングだと思っていたが、この薬を選んだ理由はまさしくそれだった。

ずっと、美しい恋に憧れていた。真実の愛を夢見ていた。そして、それらの中には当然ながら悲恋もあった。悲劇と悲恋、結末の呼び名が変わってしまう理由が何であるのか、今の私には分かる気がした。

メモによると、眠気が訪れるまでしばらく掛かり、その間はなるべくリラックスしていた方が良かった。読んだ時はどうなんだろうと思っただけで、私の心は平静だった。枕元には、特に気に入りの小説と、携帯電話を置いていた。

夜景の見えるレストランでも、異国の古城のバルコニーでも、豪華客船のフロアでも、高級ホテルのスイートルームでもなくて構わないから。プレゼントだって要らないから。だからせめて、次に見られる夢でだけは、私も気の抜けたビールじゃなくて、赤いワインとドレスの似合う大人の女になりたかった。